

アカデミックライティングの社会記号論 知識構築のディスコースと言語イデオロギー

松 木 啓 子

1. はじめに

テクノロジー、イデオロギー、そして、その他様々な制約がコミュニケーションを媒介する。我々のことばは社会から隔離されたものではなく、直接的、間接的な記号と意味の連鎖的關係の中に位置づけられる。モノログのように存在していることばでさえも、社会制度の意味システムから切り離すことは出来ない。本稿では、こうしたコミュニケーション観を基本に据えながら、アカデミックディスコース 英語のアカデミックディスコース の問題を検討する。巨視的な目標は、アカデミックライティング、即ち、学術的な制度の中で「書く」 ディスカースを書きことばの媒体を通してテキスト化する という実践を社会記号論的に展望することである。¹ 中でも、指示言語イデオロギー (referential language ideology) が支配的なテキスト観とその社会的、文化的特殊性に注目しながら、アカデミックライティングをめぐる規範と実践を検討する。近年の言語人類学におけるディスコース研究が明らかにしてきているように、言語をめぐる体系的価値観、即ち、言語イデオロギーはコミュニケーション行為だけでなく、政治、経済を始めとする様々な社会的、文化的領域に関わる (Kroskrity 2000; Philips 1998; Schieffelin et al. 1998)。本稿では、英語アカデミックライティングを媒介する記号、ディスコース、テキストをめぐる価値観の意味を考えたい。

アカデミックライティングを社会的実践として検討する際に押さえておくべき課題は、知識 (knowledge) と権威 (authority) の複合的な相互作用である (Foucault 1980)。例えば、研究者が学会誌にリサーチ論文を発表したとしま

『言語文化』9-4 : 635 - 670ページ 2007.
同志社大学言語文化学会 ©松木啓子

う。ここでは少なくとも四つの領域とその領域間の相互作用が関わってくる。學術制度としての学会、著者、知識、そして、ディスコースである。学会は発表された論文とその著者に権威を与える。査読や修正、編集の過程を前提にした學術誌発行のシステムはこうした権威の構築を支える。また、学会自体もその過程で自らの権威を堅固なものにしていく。学会の歴史は學問分野の歴史と多くの場合重なり、象徴的価値を持つ。このような学会や學術コミュニティによる承認のシステムを通して、書き手は「著者」として権威付けされるのである。更に、論文の中で論証される知識も権威付けされることになる。既に権威付けられた先行研究と間テクスト的關係 (intertextual relationship) を確立することによって、學問分野の知識 (disciplinary knowledge) の一部として位置づけられることになる。学会誌のデータベースの一部となり、第三者によって引用され、更なる間テクスト的な相互作用の中でその権威はより確実なものになっていくかも知れない。大学という高等教育制度の中で言及され、學術コミュニティだけでなく、より広いオーディエンスに対して影響力を持つかも知れない。最後に、これらのコミュニケーションの手段であるディスコースそのものも権威付けされる。学会、著者、そして、知識の存在もディスコースなしではあり得ないが、ディスコースそのものが再帰的な (reflexive) 力を持つようになるのである。つまり、何が語られているのかという問題に合わせて、どのような語られ方がされているのか、されるべきなのかというメタ言語的諸問題は知識構築の手段であると同時に、それ自身再帰的な秩序を形成する。「論理的」な語られ方なのか、「客観的」な語られ方なのか、ある特定の知識の語られ方そのものに権威が与えられるのである。用語の選択、統語上のパターン、論証のためのレトリックから、参考文献リストの様式、図や表をめぐる視覚的なテキスト上のフォーマット、句読点の打ち方まで、秩序はすみずみまで制約を与える。こうしたディスコースの権威が実現されている一番身近な場はアカデミックライティングの教育現場であろう。規範、つまり、どのように書くのか、書くべきなのかという制約は「ライティング」という実践を媒介し、当事者も多くの場合、教師自身も 気がつかないうちに政治学的な意味を再生産する。

以下は大きく二つの議論から構成される。まず、前半(II、III、IV)では、

アカデミックライティングを媒介する制約の問題を検討する。「アカデミックディスコース」は中立的なカテゴリーではなく（従って、「アカデミックライティング」も中立的なカテゴリーではないことになる）そこでは、指示言語イデオロギーと連動しつつ、書きことばとテキストをめぐる規範が媒介するのである。こうした制約がアカデミックディスコース自体の社会記号的側面を見えにくくしてきたと同時に、アカデミックライティング研究の出発点にもなっていることを指摘する。一方、後半（V、VI）の議論では、学術コミュニティのコンテクストに注目しながら、アカデミックディスコースの実践を検討する。特に、前半で論じる規範との緊張関係の中で、非常に微妙な形で現れる指標言語 (indexical language) の問題を検討する。具体的には、第一人称複数代名詞 “we” の指標性 (indexicality) に焦点をあてる。ここでは、アメリカ人類学における有名な「ミード・フリーマン論争」(Mead-Freeman controversy) からの事例に注目しながら、論争に巻き込まれる学術コミュニティの危機的状況の中での “we” の意味を考える。本稿の関心は20余年に渡る同論争の網羅的、総括的分析ではなく、そこに見られる指標性の重要性を見ることによって、アカデミックディスコースと社会的コンテクストとの相互作用を再考することである。

II. アカデミックディスコースと規範

最初に、これまでの研究において中立的な用語として前提とされてきた「アカデミックライティング」という出発点そのものにまず注意を喚起したい。一般的な傾向として、「アカデミックライティング」は英語作文教授法の向上を目標とする応用言語学やレトリック研究における数多くの先行研究を背景にした用語である。教育そのものを指す場合もあれば、一方では、ライティング行為そのものを指す場合もある。また、その書き手は大学生だけでなく、高校の学生から研究者まで幅広い。英語を母語とする人達、そうでない人達も対象となる。一方、研究、分析の理論、方法論もテキスト言語学、社会言語学、対照語用論、コーパス言語学などに跨っており、決して一枚岩的なものではない (Flowerdew 2002)。質的、量的分析を取り入れたこれらの分野のディスコース分析の最近の発展には目覚ましいものがあり、本稿も多く

を負っている。冒頭で示したように、本稿では、「アカデミックライティング」によって、学術的な制度の中で「書く」ディスコースを書きことばの媒体を通してテキスト化する という行為を表す。従って、アカデミックライティング研究とは、そうしたディスコースのテキスト化をめぐる研究ということになる。ところで、ここでいう「そうしたディスコース」とは一体どんなディスコースを具体的に言うのだろうか？

結論から先に述べると、「そうしたディスコース」に対応する唯一のディスコース様式など存在しない。Geisler (1994) が指摘しているように、理想としての規範が存在するだけである。例えば、Swales (1990) はアカデミックディスコースを学位論文、研究助成金申請のためのプロポーザル、アブストラクト、リサーチ論文、学術本などのいくつかのジャンルに分類した上で、リサーチ論文を研究者の研究活動における「中心的なジャンル」(“the key genre”)として位置づけている (Swales 1990: 177)。それならば、「リサーチ論文」とはどういうディスコースなのかと言う時、それぞれの学問分野によって多様なことが議論されることになる。こうした意味では、近年、特定の学問分野のディスコースで繰り返されるレトリックや言語形式がテキスト上の問題に留まらず、分野の知識構築や学術コミュニティの形成に深く関わっていることが多くの研究者によって指摘されてきている。そして、その視点は、非常に巨視的で抽象的なレトリックのパターンを見るものから、具体的な語彙選択や統語上のパターンなどのミクロな言語形式を見るものまで幅広い。例えば、アカデミックディスコースとレトリックの問題を論じた記念碑的研究として、White (1978) はナラティブと歴史理解の関係について多くの注意を喚起した。人類学の領域では、Clifford and Marcus (1983) による *Writing Culture* がある。ここでは、人類学の異文化表象における「他者」構築のレトリックが検討され、フィールドワークという方法論を背景にした人類学者や知識の権威をめぐる政治的問題が論じられている。一方、より詳細な言語分析を行っているものでは、Hyland (2002) があり、哲学、社会学、応用言語学、マーケティング、電子工学、機械工学、物理学、生物学の多分野における学会誌からのデータに基づき、その間に見られる様々な言語形式上の違いを論じている。例えば、書き手の論証上の視点を指標する様相

(modality) をめぐって、統語上のパターンや助動詞、動詞などの形式にまで分析の射程を広げている。更に、Atkinson (1999)によるロンドン王立協会 (The Royal Society of London) 発行の学会誌をめぐる通時的な研究もある。17世紀から20世紀までの3世紀間の *Philosophical Transaction of the Royal Society of London* に掲載された科学論文に現れる言語形式の変化を追うことによって、Atkinsonはそのディスコースパターンが単一のものではないことを論じている。²

一方、「アカデミックディスコース」は総合的カテゴリーとしても論じられてきている。例えば、Chafe (1982) による書きことばと話しことばの比較研究においては、アカデミックディスコースは四つの代表的ジャンルの一つ (他の三つは「日常会話」、「手紙」、「講義」) として分析の対象となっている。ここでは、どのような研究分野のディスコースなのか、また、どのようなジャンルのディスコースなのかは明らかにされないまま、名詞化や受動態の使用頻度の問題が論じられている。そして、テキスト内の情報のまとまりの度合いを表す「断片化」(fragmentation) 「統合化」(integration)、話し手と聞き手、書き手と読み手の関わり合いの度合いを表す「関与」(involvement) 「分離」(detachment) という二つの機軸に基づきながら、Chafeはアカデミックディスコースが統合と分離の特徴を示す “formal written language” (形式的な書きことば) の典型例であることを論じている (cf. Chafe 1985)。³ 一方、Biber (1988)の研究においては、膨大なコーパスの統計分析 (全23のジャンルにまたがる合計960,000語のコーパス) に基づき、アカデミックディスコース (Biberは “academic prose” としてまとめている) の全体的特徴が示されている。語彙レベルと統語レベルにおける67の言語的特徴を手がかりとしながら、Biber はアカデミックディスコースが抽象的情報中心になっている傾向やコンテキストに依存しなくても分かるような「明瞭な」 (“explicit”) な指示言及が多く用いられる傾向などを抽出している (Biber 1988: 172-177)。実際には、Biberのカテゴリーはいくつかの研究分野別 (自然科学、医学、数学、社会科学、政治学、法律、教育、人文科学、工学) のサブカテゴリーから構成されているが、彼はこれらを横断する総合的特徴を提示しようと試みている。

確かに、多様性と全体像をめぐるこれらの研究は方向性 (つまり、多様性

と普遍性という二つの異なる方向性)においては異なるが、言語形式やレトリックのパターンに注目する点で共通している。その意味では、本稿はこれらのアプローチとは少し異なった視点からアカデミックディスコースを検討したい。冒頭でも論じているように、アカデミックディスコースは学術コミュニティ、著者、知識との相互作用の中で価値 権威的価値 を与えられる。メタ言語的、再帰的な秩序の形成は特定の権威構築装置の中でなされるのであって、単独ではあり得ない。従って、各学問領域におけるディスコースとレトリックの研究は重要な視点を提供する。しかし、本稿が焦点を当てるのはディスコースの表層に現れる現象ではなく、メタレベルにおける記号作用に関わるものである。書きことばの媒体を通して特定の現象を「知識」に変えるディスコースの記号論的課題とは何であろうか。そこにはどのような社会と記号に関する前提が存在しているのだろうか。更に、アカデミックディスコースが英語であることをめぐる特殊性 社会的、文化的特殊性 は何であろうか。本稿では、これらの課題を検討するにあたって、脱コンテキスト化(decontextualization)とコンテキスト化(contextualization)の二つの記号作用を重視する。ディスコースの意味を文化的、社会的コンテキストの中で捉えることは言語人類学の出発点であるが、中でも、これらの概念は社会的実践としてのディスコースにおける記号作用の二つの志向 自律的テキストへの志向と社会的コンテキストの広がりへの志向 の間にある緊張関係を解明してきた (Bauman and Briggs 1990)。以下では、これらの概念を援用しながら、知識構築のディスコースをめぐる記号と社会の問題を論じたい。

III . 知識構築と自律的テキスト観

Jakobson (1960) によれば、コミュニケーションには指示機能 (referential function) だけでなく、メタ言語機能 (metalinguistic function)、詩的機能 (poetic function)、交話機能 (phatic function)、動能機能 (conative function)、感情機能 (emotive function)の複数の機能が存在するとされる。この点で、「今、ここ」で起こる会話などのオーラルコミュニケーションと違い、書きことばとしてのアカデミックディスコースは、「今、ここ」のコンテキストから切り離されても解釈可能な指示的意味が支配的なものとして捉えられ、特定の

解釈フレームを更なる規範として生み出してきた。パラ言語（例えば、イントネーションやジェスチャーなど）などの非言語が介在しないコミュニケーションにおいて、また、意味の共同構築に参加する直接的なオーディエンスが不在のコミュニケーションにおいて、語彙レベルにおける非曖昧性や統語レベルでの結束性に基づく命題上の論理性は重要な課題とされる。そこでは、語彙と意味が一对一で対応していると前提され、統語上の論理的な文のつながりは、所謂「論理的な思考」のアイコン (icon) となる。また、前述した Chafe (1982) や Biber (1988) の研究の中でも重要な特徴の一つとして挙げられているが、行為主を背景化した受動態に基づく非人格化も特定の知識構築に貢献する。知識は「今、ここ」の「私」の主観的視点　しばしば、「パイアス」とされる　からは切り離された領域において客体化されることによって、「客観的」と解釈されるのである。例えば、アカデミックライティング教育のための教科書に多く見られるように、「論理性」と「客観性」をどのように構築するかという問題はアカデミックディスコースにおける論証のストラテジー上の問題として重要視されてきた。どのような接続詞によって文を論理的に繋げるのか、どのようなトピックに基づいてパラグラフという自律的な文章の単位を構成させるのかという諸問題は英語のアカデミックライティング教育の基本として取り上げられている (e.g., Oshima and Hogue 2006)。そして、こうした意味構築のメカニズムの前提となっているのが、ディスコース外のコンテキスト要因に頼らない脱コンテキスト化されたテキスト (decontextualized text)、または、心理言語学者 Olson (1977) によれば、「自律的テキスト」 (autonomous text) ということになる (cf. Guiser 1994)。

文字に基づく書きことばは時間と空間の異なるコミュニケーションを可能にする一方で、特定の「今、ここ」に根ざしたオーラルコミュニケーションにあるような指標的装置を不可能にする (cf. 松木 2001)。コンテキストとディスコースの相互作用が質的に異なってくるわけであり、共通の「今、ここ」が前提とされていない　もしくは、されていても認識されにくい　コミュニケーションの場合、自律的で脱コンテキスト化されたテキストがより適切な解釈の達成ために理想的であるという論理には一見説得力がある。何故ならば、こうしたテキストの自律性は論証される知識の自律性　つまり、

脱コンテクスト化されても同じ価値を持つ知識の価値を意味するからである。書き手そして、読み手のアイデンティティからは独立した知識の自律性、「今、ここ」から切り離されても存在可能な知識の自律性を意味するからである。更に、それは知識の権威の問題にもかかわってくる。しかし、本稿の後半で示すように、また、多くの研究者が論じてきているように、実際のアカデミックディスコースにはコンテクストとのダイナミックな相互作用が存在するのであり、完全に脱コンテクスト化された「自律的テキスト」はバーチャルなメタ概念であって、現実には実践されているわけではない。特に、アカデミックディスコースと学術コミュニティとの相互作用の問題を考える時、ある知識が過去や未来の知識との関係性の中にあることを考える時、テキストが全く自己完結していることは現実にはあり得ない。引用のされ方、他のテキストへの取り込まれ方によってその自律性は常に脅かされる。知識がテキスト化されることによって固定化され、超時間的な地位と普遍的な権威を得るというのは究極的にはイデオロギーである。例えば、宗教、法律の領域に見られるように、特定の経典、法典に不動の価値を与えるかどうかは、テキスト自体に自律的な価値を付与する権威構築装置が常に作動してなければならない。孤立しているかのように見えるテキストも常に潜在的再コンテクスト化の途中にあるのであり、間テキスト性 (intertextuality) の網目の中に組み込まれている (Bauman 2004)。「テキスト」はディスコースのメタ概念であるに過ぎない。つまり、社会的実践としてのディスコースの一断面を切り取った、バーチャルなアーティファクトに過ぎないということになる (Silverstein and Urban 1996)。ところが、視覚的に文字化されたテキストの場合、そのアーティファクトとしての物理性、個性性こそがこの循環性を見えにくくし、更に、コミュニケーション行為としてのアカデミックライティングを媒介する制約を見えにくくするのである。

ここで注意を喚起したいのは、自律的テキスト観が英米の社会的、文化的コンテクストの中でどのように機能しているのかという点である。Scollon and Scollon (1981) は異文化コミュニケーションの視点から脱コンテクスト化された書きことばの問題を検討している。彼らはアメリカ先住民アサバスカン語族の子供たちが学校で英語の散文を学習する際のディレンマや違和感を

論じ、その社会的、文化的特殊性を指摘している。Scollon and Scollonによれば、「今、ここ」から切り離されたコミュニケーションが、先住民の慣れ親しんでいるコミュニケーション観から乖離した特殊なものということになる。Collins (1996) はこうした自律的テキスト観を「テキスト主義」(textualism) と呼びながら、アメリカにおける教育現場での偏見や矛盾を論じている。コンテキストから切り離された意味の理解を試すテストやライティング学習などに見られるように、そこには言語の指示的意味のみに注目するテキスト観が理想 制約 として存在し、学習者のコミュニケーション行為を媒介するのである。Collinsはそれがアメリカ社会の知的領域全般に根強く存在していると指摘する。例えば、Mertz (1996) は同じ問題をアメリカの司法制度のコンテキストで論じている (cf. Crapanzano 2000)。Mertzによれば、脱コンテキスト化された法律の権威と実際のコンテキストにおけるその適用の間には常に緊張が存在するという。Mertzはロースクールの教育現場でのエスノグラフィックな研究を通して、法律専門家を目指す学生たちがテキスト 即ち、法律体系 をめぐるイデオロギーを学ぶ一方で、過去の事例に基づきながら必要に応じたプラグマティックな解釈とディスコースのパターンを学んでいく過程を論じている。書きことばにおけるコミュニケーションは決して中立ではない。つまり、特定の社会的、文化的意味システムとの相互作用の中で、同じ媒体もそれぞれ違う意味づけがされる。我々が「中立」であると当然視していても、文字もディスコースも、そして、「アカデミックディスコース」も社会的、文化的なコンテキストの中に位置づけられ、特定の機能と意味を担うのである。

Olson (1977) による議論を見てみたい。興味深いのは、17世紀以降の印刷技術の普及を期にますます「明晰性」(“explicitness”)を増していくとされる自律的テキスト観である。Olsonによれば、ギリシャ時代における表音記号アルファベットの発明によって、オーラルコミュニケーションでは多くの場合コンテキストに頼らざるを得なかった音と意味の対応関係がより曖昧でなくなったという。これが明晰なテキストを可能にする第一の条件である。そして、第二の条件の印刷技術によって、不特定多数の読者が読むという新しいコミュニケーションの形が生まれた。こうした社会的コンテキストの中で、

いかにテキストの意味から曖昧な部分を取り除くのかという課題が自律的なテキストの必要性につながり、その明晰性はますます際立っていったという (Olson 1977: 262-271)。更に、より最近の論文Olson (1993) では、自律的なテキスト内の指示的意味領域と解釈領域の明確な分離こそが「客観性」の構築に貢献し、近代科学の発展に大きく影響を与えたことが論じられている。リテラシー技術の一系列的発展と様々な社会的領域への必然的帰結のシナリオを描くGoody (1986)、Goody and Watt (1968)、Ong (1982) と同じように、Olsonの文化進化論的な議論には問題がある。アルファベットの発明や印刷技術のテクノロジーとその影響の因果関係に関する自己完結的なシナリオは西欧中心主義を思わせるものであり、Street (1984) やCollins and Blot (2003) のようにテクノロジーとリテラシーの問題をより具体的な社会的、文化的条件の中で捉える言語人類学者からは大きな批判を受けている (cf. Warner 1990)。しかしながら、Olson の説が普遍的なものではなく、あくまでも英米の社会的、文化的コンテキストの中で発展してきたテキスト観 英語のテキスト観 を説明しているのだという前提に立つ時、彼の議論は示唆的である。

Olson (1977) は自律的テキスト観がチョムスキーによる近代形式主義的言語学に根本的なバイアスを与えていることを指摘する。また、その発展の系譜に関して、16世紀ドイツの宗教改革者ルター (Martin Luther) による言語観、イギリスの評論家 (essayists) たちの言語観、更に、近代科学の発展と連動する論理的思考や実証主義との関連で説明する。

....I propose that Chomsky's theory is not a theory of language generally but a theory of a particular specialized form of language assumed by Luther, exploited by the British essayists, and formalized by the logical positivists. It is a model for the structure of autonomous written prose, for what I have called text (Olson 1977: 272).

Olsonに限らず、散文としてのアカデミックディスコースの発展はこれまでも17世紀英国における近代科学の起源の問題と結び付けられて論じられてき

ており、学術制度としてのロンドン王立協会の新権威と求心力の重要性は多くの研究者によって指摘されてきている。特に、自然科学のディスコースの系譜を考える上で、当時の実験科学の担い手たちがどのようなディスコースを目指していたのかという問題は興味深い。一方、知識をめぐるディスコースの巨視的な発展には、近代科学の誕生と密接に関連していた宗教ピューリタニズムの問題も切り離せない (Cohen 1990; Jones 1961; Merton 1970)。更に、政治、経済、宗教の領域全般に影響力を持った功利主義 (utilitarianism) の価値観も関わってくる (Adolph 1968; Jones 1953; cf. Scollon and Scollon 1995)。中でも、当時の英国社会において、どのようなディスコースのあり方が特定の目標を達成する上で効率がよいのかという実利的な問題は、社会的、文化的領域全般においてラテン語の権威が衰退し、英語が「俗語」(vernacular) としての地位から「国語」(national language) に変貌していく歴史と深く関わる。

Jones (1953) は、15世紀から17世紀に渡る英語観の変遷を「雄弁性を欠いた言語」(“the uneloquent language”) から「規則づけられる言語」(“the ruled language”)、そして、「役に立つ言語」(“the useful language”) への変遷として捉え、英語が公共圏においてその権威を確立していく巨視的な流れを論じている。15、6世紀においては「雄弁性」(eloquence) が理想であり、そのような理想を具現するのはラテン語やギリシャ語であった。英語が「雄弁性を欠いた言語」としての劣等的立場から抜け出して、辞書や文法書の編纂に基づく「規則づけられる言語」としての地位を確立し、更に、「役に立つ言語」として社会的、文化的な機能を果たす上での優越的な価値を帯びていくというJonesの説明は、英語が近代的知識やテクノロジーと連動しながら発展していく大きな変化を理解する上で参考になる。⁴ 当時の英国史を詳細に追うことは本稿の目的とするところではないが、この英語の位置づけ 古典語との比較の中での相対的位置付け は知識構築をめぐるディスコースの社会的、文化的意味を理解する上で重要である。そして、その手がかりとなるのが、当時広い領域において理想と見なされたディスコースのスタイル プレーンスタイル (plain style) である。以下では、プレーンスタイル、即ち、「平明性」(plainness) に価値を置くディスコーススタイルと自律的テク

スト観、そして、それらを媒介する言語イデオロギーの問題を論じたい。

IV . アカデミックディスコースと言語イデオロギー

17世紀英国の実証主義者たちにとって、観察や実験を通して発見される自然界の物質、物体、現象をどのように正確に表象するのかという問題は言語の問題でもあった。17世紀のディスコースに関する研究の中で繰り返される“simple”や“clear”といった還元(reduction)への志向を表す形容詞は当時のディスコースにも頻繁に登場する。例えば、ロンドン王立協会が正式に発足してから5年後の1667年に出版されたトマス・スプラット(Thomas Sprat)による*History of the Royal Society*においても明記されている。Aasleff(1982)が指摘するように、同書は協会に承認された宣伝書としてプロパガンダ的性格を帯びており、従って、ここでのスタイルへの言及は当時の言語をめぐるイデオロギーを考える上で重要な資料である。

They (the members) have therefore been most rigorous in putting in execution, the only Remedy, that can be found for this extravagance: and that has been, a constant resolution, to reject all the amplifications, digressions, and swellings of style: to return back to the primitive purity, and shortness, when men delivered so many things, almost in an equal number of words. They have exacted from all their members, a close, naked, natural way of speaking; positive expressions; clear senses; a native easiness: bringing all things as near Mathematical plainness as they can: and preferring the language of Artizans, Countrymen, and Merchants, before that of Wits, or Scholars .(quoted in Vickers 1987: 172) (下線は筆者による)

しばしば引用されるこの一節では、協会のメンバー達が古典語に象徴される大げさなスタイルを拒絶し、「本来の純粋性と簡潔性」(“the primitive purity and shortness”)に立ち返ることを目指してきたことが表現されている。プレーンスタイルへの志向は王立協会の周辺だけで見られた現象ではなかったが、新しい科学の領域における表象の問題はアカデミックディスコースの系

譜を考える上で重要である。しかしながら、それでは実際にプレーンスタイルとはどんなスタイルを言ったのだろうか。スプラットによれば、“extravagance”、“amplifications”、“digressions”、“swellings of style”を特徴とするスタイルを拒絶した後に到達するスタイルであり、“clear”、“naked”、“natural”、“positive”といった形容詞で特徴づけられるスタイルであり、「数学的な平明性」(“mathematical plainness”)をモデルとするスタイルであり、更に、職人や商人のような学者以外の一般市民が使うようなスタイルということになる。これらの描写は古典語との二項対立的な構図の中で捉えた時にイメージは湧くが、具体的にどのようなスタイルなのかはわかりにくい。Jones-Croll 論争に見られるように、当時のプレーンスタイルの厳密な特定は研究者の間においても意見が分かれるところである (Aldoph 1968; cf. Jones 1951)。興味深いのはVickers (1987)による指摘である。スプラットによる呼びかけにも関わらず、当時の王立協会をめぐる実証主義者の実際のディスコースにはメタファーや修辭的表現が相変わらず使われ続けたという(Vickers 1987: 11-18; cf. Montgomery 1996)。こうした実践とのギャップについて考える時、プレーンスタイルとは新しい科学的知識の表象のための理想 規範であったという見方が可能になる。

当時の還元を志向するディスコース観を体系的に表すものとして、Bauman and Briggs (2003) はジョン・ロック(John Locke)による評論(エッセイ)に注目している(cf. Bauman and Briggs 2000; Guyer 1994)。1689年に初出版されたとされる*An Essay Concerning Human Understanding*中の第3巻“Of Words”は17世紀の言語と記号の問題を検討する上で貴重な文献のひとつとされてきた。そこに貫かれるテーマは、言語形式と指示的意味の1対1の対応に基づきながら、個人が合理的で論理的で明確な意思疎通をいかにして行えるのかという理想的コミュニケーションの問題である。ロックはこのような理想の対極に修辭的で雄弁な古典語を位置づけ、先のトマス・スプラットと同じように不信感を表わすのである。特に、そのレトリックに見られるような言語の多機能性、意味の多義性はミスコミュニケーションの原因であり、言語の「誤用」(“abuse”)や「誤魔化し」(“cheat”)であるという考えが繰り返し述べられる。

Since wit and fancy finds easier entertainment in the world, than dry truth and real knowledge, figurative speeches, and allusion in language, will hardly be admired, as an imperfection or abuse of it. I confess, in discourses, where we seek rather pleasure and delight, than information and improvement, such ornaments as are borrowed from them, can scarce pass for faults. But yet, if we would speak of things as they are, we must allow, that all the art of rhetoric, besides order and clearness, all the artificial and figurative application of words eloquence hath invented, are for nothing else but to insinuate wrong ideas, move passions, and thereby mislead the judgment; and so indeed are perfect cheat...(Locke 1997: 452) (下線は筆者による)

ロックによれば、“dry truth and real knowledge” や “information and improvement” は、“wit and fancy” や “pleasure and delight” の対極にある。修辭的言語によって前者の新しい科学的発見や知識を表象することは不可能であり、「誤った考えを吹きつけ、感情を焚き付け、判断を誤らせるだけの完全なる誤魔化し」になってしまう。「誤用」を避けるために、新しいコミュニケーション 評論を通して何度も繰り返される “clear and distinct” によって特徴づけられるコミュニケーション の可能性をロックは説くのである。そして、その前提条件が記号と物の結びつきに関するものであり、ロックによって表現されている言語イデオロギーを理解する上では重要な点となる (cf. Foucault 1970 [1966])。

ロックによれば、記号は「物」を意味するのではなく、物の「観念」(idea) を意味する。記号と物が直接結びつくのではなく、我々の内にある観念を介在させること、そして、それが恣意的な結びつきによるものであることにロックは注目する。Aasleff (1982) はソシュールにつながる近代言語学の発端をロックに見出すが、こうした記号の恣意性の問題が第3巻の冒頭で論じられている。“... he (human being) should be able to use these sounds, as signs of internal conceptions, and to make them stand as marks for the ideas within

his mind....” (Locke 1997: 361)。記号、観念、そして、物との間の結びつきを可能にするのは彼の呼ぶところの「一般的名辞」(“general terms”)である。ロックによれば、存在するすべての物が固有名を持つことは不可能、無駄であり、我々が物の意味を理解できるのは一般的、集合的な記号によって表される抽象的な観念が介在するからだという (ibid., 367)。そして、これらの一般的名辞が前提とするのは「今、ここ」から切り離された記号観である。

Words become general, by being made the signs of general ideas: and ideas become general, by separating from them the circumstances of time, place, and any other ideas, that may determine them to this or that particular existence. (Locke 1997: 368; quoted in Bauman and Briggs 2003) (下線は筆者による)

ロックは、社会から切り離された記号がコミュニケーションの記号となる時、記号と観念は一对一の対応関係で結ばれ、当事者によってその対応関係に基づく指示的意味が了解され、曖昧でない明確なコミュニケーションが可能になると考えたのである。しかし、ロックの考えによれば、指示的意味の了解には常にミスコミュニケーションの可能性「誤用」(“abuse”)が潜在しており、それを避けるための確認の手続き「方策」(“remedies”)が必要とされるのである。

例えば、同巻の後半では、ロックは五つの合理的な「方策」を段階的に論じている。その一つめが、“...a man should take care to use no word without a signification, no name without an idea for which he makes it stand” (Locke 1997: 455)、つまり、コミュニケーションの際には使う言葉がどのような(指示的)意味なのかを必ず捉えておかなければならないという。二つめは、“(...it is) not enough a man uses his words as signs of some ideas, those ideas he annexes them to, if they be simple, must be clear and distinct, if complex, must be determinate...” (ibid., 456)、つまり、ただ意味を捉えておくだけでは十分ではなく、表す観念が単純な場合は「はっきりと明確」な対応関係を打ち立てなければならず、一方、複合的観念(抽象概念)の場合は「確固とした」もの

でなければならないとする。更に、明確で確固としているだけでは十分ではなく、“...they (men) must also take care to apply their words, as near as may be, to such ideas as common use has annexed them to” (ibid., 457)、つまり、記号と観念の間に関係を打ち立てる際には、社会で一般に通用している関係に近いものでなければならないとする。しかしながら、社会で通用している関係は表面的には見えにくいので、ひとりひとりが意識して正確であることを心がける必要がある。そのためには、次の方策として、“...after the observation of the foregoing rules, it is sometimes necessary for the ascertaining the signification of words, to declare their meaning....” (ibid., 458)、つまり、社会で通用している関係の観察に基づいて、そうした対応関係をはっきりと「言明する」(“declare”) することが必要だとする。最後に、記号と観念の対応関係についてはっきりとした言明をしなければ、意味の定義づけは不可能となるとロックは指摘する。従って、少なくとも、“...in all discourses, wherein one man pretends to instruct or convince another, he should use the same word constantly in the same sense...” (ibid., 465)、つまり、ひとりひとりが一貫して同じ言葉は同じ意味で用いるべきであるとする。

ロックにとってのプレーンスタイルとは、記号と観念の恣意的な結びつきとその確認と言明の手続きに基づく合理的なコミュニケーションのスタイルであり、言語の多義性や曖昧性を廃し、指示的意味のみに集中するコミュニケーションのスタイルであり、古典語の対極に位置づけられた英語の価値を具現するスタイルということになる。更に、印刷技術の一般的普及が本格的になり、プレーンスタイルは不特定のオーディエンスを想定したコミュニケーションのスタイルでもある。そして、こうしたスタイルを媒介するのが指示言語イデオロギーであり、Bauman and Briggs (2003) によれば、それは「指標性の抑圧」(“suppression of indexicality”) に基づくイデオロギーである。つまり、特定の社会的アイデンティティ ジェンダー、クラス、エスニシティ や社会的コンテクストを前提としない記号こそが、ロックの言う“dry truth and real knowledge” や “information and improvement” の表象を可能にするのである。このような記号の捉え方が前提として存在しなければ、書き手や読み手の具体的なアイデンティティから独立して存在する知識の構

築、「今、ここ」から乖離した「本当の」(“real”)知識の構築は不可能ということになる。当時の王立協会の周りに集まった人々(ロック自身も1668年に会員として選出された)が目指した知識とは実証主義的であった。その中心は観察と実験の方法論によって発見される物質や現象をめぐる自然科学的知識であり、非社会的な記号観はそのような知識の表象と連動したのである。記号と社会の分離に基づく意味の抽象化、脱コンテクスト化の手続きによってこそ、ロックは自らの哲学が目指す近代的知識の構築が可能と考えたのである(Bauman and Briggs 2003: 39)。

Silverstein (1976) は近代言語学が象徴的レベルの意味、即ち、コンテクストから切り離された指示的意味のみを研究対象としてきた一方で、指標性の問題を置き去りにしてきたことの致命的盲点 指示言語イデオロギーの盲点 を指摘する。コンテクストとの繋がりによって初めて意味を成す指標言語が我々のコミュニケーションにおいて決定的な役割を担うのにも関わらず、指示言語の偏重がそうした現実を見えにくくするのである。言語学の分野以外にも指標性を無視してきたことで大きな反省を強いられた領域がある。近年の文化人類学における異文化表象である。ポスト構造主義やポストモダン思想によって非歴史的、非主観的な「文化」や「他者」のイデオロギー性が指摘され、表象の可能性や不可能性をめぐる問題は様々な視点から論じられてきた(松木1999; cf. Clifford and Marcus 1983)。Bauman and Briggs (2003) の言うところの「指標性の抑圧」から解放された民族誌の実験は現在においても相変わらず継続中である(e.g., Briggs 1996; Clifford 1997; Inoue 2006)。勿論、知識構築のディスコースにおける指示言語の重要性は大きい。しかしながら、van Dijk (1993) が指摘するように、アカデミックディスコースは「エリートディスコース」として社会的に大きな影響力を持つものであり、テキストに閉じ込められた意味がコンテクストに向かって開かれている社会記号論的現実を再認識する必要がある。このことはアカデミックライティング研究、更に、ライティング教育においても極めて重要な課題であると考えられる。

ここまでの前半の議論では、英語のアカデミックディスコースを媒介する制約としてのテキスト観と言語イデオロギーについて論じてきた。そして、

その発展の社会的、文化的特殊性を考えるにあたって、Olson (1977) によるシナリオに基づいて17世紀英国における近代科学の誕生にまで遡った。先にも述べたように、今日のアカデミックディスコースは研究分野やジャンルによって様々なパターンを見せているのであり、17世紀から21世紀までの流れを一系的に捉えるのは不可能である。しかしながら、これらの多様なディスコースが総じて究極的には知識と権威の構築のためのディスコースであるという点を再考する時、脱コンテキスト化への志向とそれを媒介する言語イデオロギーは、17世紀のロックにとっても今日の我々にとっても共通した記号論的課題となる。

V. アカデミックディスコースと学術コミュニティ

ここからの後半の議論では、アカデミックライティングが社会的実践であることを基本に据えながら、ディスコースのコンテキスト化への志向を論じるが、その前に、アカデミックディスコースのコンテキストについて再確認しておきたい。例えば、ある論文のリサーチの対象となる現象が起こった時間や場所はコンテキストであるし、そのような現象の原因や結果、更に、関わる人々もコンテキストとなる。リサーチをめぐる先行研究もコンテキストである。また、論文の発表の年月日もコンテキストである。つまり、テキストを取り巻く歴史的状況、物理的状況、社会的状況、文化的状況すべてがコンテキストに成り得るのである。問題は、書き手がこれらの多様なコンテキストの中からどの情報をディスコースに取り込んでいるのか コンテキスト化しているのか ということになる。更に、オーディエンスとの相互作用の問題も考えれば、コミュニケーションを通して新たなコンテキストが形成されることになる。書きことばのコミュニケーションにおいては、メッセージの送り手 即ち、書き手 と受け手 読み手 が「今、ここ」のコンテキストを共有しないことは何度も指摘してきたが、両者がどのような関係にあるのかという状況によって多くのコンテキスト情報が共有され得るし、また、逆の場合もある。その意味では、アカデミックディスコースの書き手と読み手は多くの場合同じ学術コミュニティのコンテキストを共有しており、本稿ではその重要性に注目したい。

学術コミュニティとアカデミックディスコースの相互作用を考える上で、Rudwick (1985) による19世紀英国の地質学の歴史的研究は示唆的である。1807年に設立されたThe Geological Society of London (ロンドン地質学会) は17世紀以来の実験科学の伝統の中に位置づけられ、その目的は国内外各地における新しい鉱物の発見や採集であり、定期集会では17世紀以来の帰納的方法論による「事実」(“facts”) の報告が最優先的課題だったという。本稿との関連で興味深いのは、ロンドン王立協会を始めとする当時の学会集会における報告が通常「品位のある沈黙」(“dignified silence”) で迎えられ、意見の交換や議論は科学的知識を歪曲するものとして奨励されなかったという指摘である。しかし、地質学的知識が徐々に蓄積されていく中でこれらの「事実」をめぐる意見や解釈が地質学会では議論され始め、それはやがて地質学理論の発展につながっていったという。つまり、学会はこうした知識への新しい取り組み方に対応するためにディスコースも発展させていったということになる。中でも、レトリックや説得が重要な課題として意識されるようになったという (Rudwick 1985: 25-26)。この例は書きことばのコミュニケーションを対象にしたものではないが、聞き手 学術コミュニティの成員達 に対してどう「呼びかける」(address) のかという課題は今日のアカデミックライティングにおける実践的課題と重なる。コミュニケーションの視点から考える時、完全に脱コンテキスト化された知識は 論理的にも、実践的にも現実世界ではあり得ない。

Hyland (2001) はアカデミックディスコースにおける書き手と「想定された読み手」(“implied reader”) との間の相互作用性を論じる。ここでは、実際の読み手が想定通りかどうかは問題ではない。問題となるのは、書き手が想定された読み手にいかに心理的に近づいて書くのかという点である。自然科学、社会科学、人文科学における八つの学問領域からのディスコース資料に基づいて、Hylandは第一人称複数代名詞“we”の重要性に注目している。彼によれば、書き手は自分自身と「想定された読み手」を同じ“we”の共同体の成員にすることによって、互いが学術コミュニティの成員であることを確認し、連帯感を構築するのだという (Hyland 2001: 559)。アカデミックディスコースにおける人称代名詞の選択の問題はこれまでも議論されてきている

が、中でも、“we-our-us”は特定の共同体帰属の問題と関わり、極めて興味深い (e.g., Wales 1999)。本稿でも、これらの代名詞に焦点をあてながらアカデミックディスコースのコンテキスト化を検討したい。しかし、本稿では、特に、Hylandが論じていないコンテキスト化の社会記号論的側面に焦点を当てて。書きことばのコミュニケーションの相互作用性を論じるためには、特定のディスコースがどのようなオーディエンスを前提にしているのかと同時に、ディスコースが「今、ここ」を超越した記号と意味の連鎖の中に位置づけられていることを再認識する必要がある。

Hyland (2001)の研究以外にも、近年のアカデミックライティング研究ではオーラルコミュニケーションにおける話し手と聞き手の対話性や相互作用性の概念がアナロジーとして援用されている (e.g., Markkanen and Schroder 1997; Myers 2002; cf. Hyland 2005)。しかしながら、これらの研究は知識構築のディスコースのコンテキスト化の問題を考察する上で貴重な視点を提供するものの、コンテキストは書き手の視点の内側に留まったままであり、オーディエンスの多様性や広がりについての議論が不足している。確かに、書きことばのコミュニケーションでは受容 (reception) の実態は書き手からは見えない領域にあり、議論はあくまでも仮説的なものに留まる。しかし、ディスコースとコンテキストの相互作用を考える上で、具体的には見えないオーディエンスに関する社会学的理解は不可欠である。近代のマスコミュニケーションの発展を考察するWarner (2002)による三つの「公衆」(public)の概念を紹介したい。Warnerも指摘するように、その境界線は時として曖昧にはなるが、アカデミックディスコースとコンテキストを考える上で示唆的である。Warnerによれば、一つめはオーラルコミュニケーションにおける「公衆」である。つまり、「今、ここ」を共有する「公衆」である。二つめは抽象的な「公衆」、即ち、日本語でいう「社会」とか「世間」とか、また、「国家」に相当するものである。構成員が具体的に誰であるかは問題にならない。誰もがそこに帰属しているというイデオロギーによって成立する「公衆」ということになる。そして、Warner自身が特に重要視するのが、第三の「公衆」である。これは、具体的なディスコースの循環 (circulation) によって結ばれるネットワーク状の「公衆」であり、逆の視点から言えば、ディスコースの循

環がなければ存在しない「公衆」ということになる (Warner 2002: 65-66; cf. Harbermas 1989; Warner 1990)。

ここで、学術コミュニティを知識をめぐるディスコースの循環によって結ばれるネットワーク状の「公衆」として、即ち、第三の「公衆」として捉えてみよう。学問分野によってその規模や性質は異なって来るが、具体的な構成員が誰であるかが全員によって了解されているものから、多数の国々からの参加者から成る大規模なスケールのものまで多様である。前者の中には第一の「公衆」に近いものがあるかも知れない。一方、後者の中には第二の抽象的な「公衆」に近いものがあるかも知れない。前者のようなコミュニティの場合であれば、Hyland (2001) の言うところの「想定された読み手」は前提となる共同体成員と重なるであろう。学会誌を通したコミュニケーションだけでなく、学会や研究会の集会などの場で実際に会って多くの会話や議論を行う関係かも知れない。しかし、後者の場合はどうであろうか。Warnerの第三の「公衆」の境界線は曖昧で潜在的には常に外に向かって広がっている。学際主義やグローバリズムによって拡張する学術コミュニティの場合、どのようにしてアカデミックディスコースとコミュニティの相互作用を論じることが可能なのだろうか。本稿では、このような場合、オーディエンスの想定は具体的な学術コミュニティの構成員を前提として行われるのではなく、より象徴的、抽象的な学問分野やその知識をめぐるイデオロギーに基づいて行われること、更に、その過程において学問分野のアイデンティティが創造されていくという意味生成のダイナミズムに注意を喚起したい。以下では、一般メディアまでをも巻き込み、アメリカ人類学の知識、そして、学問分野としての権威自体が挑戦されたミード・フリーマン論争からのディスコースの一部を紹介する。同論争をめぐる「公衆」の意味を考えながら、オーディエンスの境界線を戦略的に構築する“we” (“us” と “our” も含む)の指標的機能を考える。

指標性における二つの方向性を確認しておきたい (Silverstein 1976)。ひとつは、「今、ここ」のコンテクストに既に存在している現象を前提 (presupposition) にしている場合である。例えば、話し手のすぐ近くにある椅子を示す場合であれば、“this” という指示代名詞を使ってその椅子を指示で

きる。側において女性であることを認識できる人の場合は“she”を用いることが可能である。いずれの場合も、聞き手がこれらの意味を理解するためには、側にある物理的コンテキストがその意味解釈の鍵となる。一方、本稿で重視するのはもうひとつの指標作用である。「今、ここ」に存在していない現象を創造 (entailment) する場合である。つまり、前提とする現象がなくても、記号が新たな現象を創りだすのである。Silversteinは、こうした創造的指標性を論じるにあたり、非指示言語記号 (non-referential language) に注目する。つまり、それ自体指示的意味を持たない言語記号である。指示機能を持たないということはそれ自体何も言及しない。しかし、コミュニケーションの中で使われることによって様々な社会的意味を創りだす。例えば、イントネーションやアクセント、更に、日本語の終助詞などは良い例であろう。一方で、指示機能を持ったものには、英語の第一、二人称代名詞がある。例えば、会話のコンテキストにおける“I”は特定の「話し手」を指示しているが、その特定の会話参加者を恒久的に指すものではない。つまり、誰かが会話の流れの中で自らを“I”と言及することによって、「話し手」が創りだされるのである。また、複数形“we”については、既に述べたように、自己と他者を「含有」することによって連帯感や共同体帰属のアイデンティティという社会的意味を創造、構築するのである (更なる社会的意味の創造については以下のセクションで論じる)。Silverstein (1976) はこうした創造的指標作用に注目することによって、コミュニケーションにおける記号作用のダイナミックな側面に注意を喚起したのである。そして、その視点はオーラルコミュニケーションだけでなく、書きことばのコミュニケーションの理解にも貢献する。

VI. アカデミックディスコースとコンテクスト化

アカデミックディスコースにおける“we”の一番典型的な用いられ方は、著者が複数の場合であろう。

- (1) In this paper we argue that Derek Freeman's book...is not....(Patience and Smith 1986: 157)
- (2) We shall show that Freeman's attempted refutation of Mead is based

on.... (ibid., 157)

これらの“we”は想定された読み手は含まず、著者のPatienceとSmithのみを指す。しかし、同じ論文の中の次の例を見てみよう。

(3) Let us suppose that Freeman’s critique of Mead is successful. (ibid., 160)

ここでは、著者が想定された読み手を自分たちと同じコミュニティ“us”(“we”)の中に引き込み、議論を進めていこうとしている。Wales (1996) はこのような“we”を「ワークショップの“we”」(“workshop we”)と呼び、アカデミックディスコースではしばしば用いられる重要なレトリックとして論じている (Wales 1996: 66)。つまり、Hyland (2001) も論じているように、“we”によって書き手は自分自身と読み手 想定された読み手 を同じコミュニティ (Walesの見方に基づけば、「ワークショップ=論証のプロセス」のコミュニティということになる)の中に誘い込み、連帯感を創り出すのである。しかし、ここで注意しなければならない点は、この「含有」(inclusion)の法則と隣り合わせになっているのが「排除」(exclusion)の法則であるということである。(1)と(2)では読み手は含まれなかったが、著者二人を指しているということであまり気にならない。しかし、これらのすべての例において、“Freeman”は読み手と著者のコミュニティからは排除されているのである。“we”のダイナミックな社会記号論的側面はこれまでも論じられてきているが、単数の“I”と決定的に異なる点は、「含有」と「排除」を指標することによって特定の共同体意識の形成に深く関わることである。そして、それは暗黙のうちに“we-they”という二項対立的な位置設定をめぐるイデオロギーの形成にもつながる (Lee 1997; Singer 1989)。つまり、ここでは、書き手と読み手の“we”とFreemanがお互いに特定の社会的位置づけをされているのである。これらの例では、Freemanはいずれも文中に登場しているが、多くの場合こうした「含有」と「排除」の意味は微妙な形で指標される。

この最後のセクションでは、アカデミックディスコースとコンテキストの相互作用を“we-our-us”の指標性から考える。事例は、先の(1)と(2)

(3) がそうであるように、人類学におけるミード・フリーマン論争からのディスコースに基づく。ここで、同論争について簡単に紹介したい。その発端は1983年1月31日のニューヨークタイムズ紙夕刊の第一面記事である。記事の見出しは、“New Samoa Book Challenges Margaret Mead’s Conclusions” (*The New York Times*, Late City Final Edition, Jan.31, 1983) であった。ここで挑戦のターゲットとなっているのは、1928年代に出版された人類学の古典、マーガレット・ミード (Margret Mead) によるサモアの思春期に関する民族誌 *Coming of Age in Samoa* である。そして、ミードの古典的著作に挑戦する「新しいサモアの本」とは、3ヶ月後の4月にハーバード大学出版から発売予定の *Margaret Mead in Samoa: the Making and Unmaking of an Anthropological Myth* のことであり、著者はニュージーランド人でオーストラリア国立大学で教鞭を取るデレック・フリーマン (Derek Freeman) である。学術本をめぐる記事が有力紙の第一面に掲載されるのは異例である。その直接的な理由はハーバード大学出版の宣伝プロモーションのストラテジーであったというが、そもそもの理由はミードのアメリカ社会における知名度である。1970年代に亡くなるまで、ミードは学術コミュニティの内外においてアメリカ人類学のイコン的存在であり、Yans-McLaughlin (1985) が指摘するように、アメリカ人類学そのものであった。そのようなミードの過去の業績、中でも、英語以外に16もの言語に翻訳されているサモアの思春期に関する民族誌にフリーマンは挑戦したのだった。フリーマンによれば、サモアの青少年が同じ年頃のアメリカの若者が経験する葛藤やストレスからは全く解放されているというミードの記述は誤りであったという。アメリカ人類学の創始者的存在であるフランツ・ボアズ (Franz Boas) の文化決定論的な視点が弟子のミードに虚像としての楽園のサモアを描かせたというのである (Freeman 1983)。80年代は既に異文化表象をめぐるイデオロギーの問題が議論され始めており、今日のコンテキストにおいて考えればフリーマンの論点自体はそれ程ショッキングなものではないかも知れない (e.g., Clifford and Marcus 1983)。その意味では、20年前においても、そして、今日の人類学においても守らなければならない対象はミードのサモア表象それ自体ではなく、ミードと彼女の師フランツ・ボアズが象徴するアメリカ人類学とその発展の中で構築されてきた知

識の正当性であった。言い換えれば、フリーマンはアメリカ人類学の知識の権威に挑戦したのである。例えば、この論争の根深さを示唆するものとして、20年経った2003年（フリーマン自身は2001年に死去している）にもアメリカ人類学の主要学会誌である *American Anthropologist* に関連論文が掲載されている（cf. Roscoe 2003）。それにしても、1月31日のニューヨークタイムズ誌に始まって、タイム誌、ライフマガジン誌、サイエンス誌、そして、テレビのメディアまで巻き込んだ当時の記録をざっと眺めただけでも極めて異様な印象を覚える（e.g., Robin 2004）。Warner (2002) の第三の「公衆」が学術コミュニティを超えたところで拡張していく様子が理解できる。

フリーマンの本が出版された1983年内には *American Anthropologist* で早速特集が組まれ、様々な人類学者が論争に参加している。この例（4）は、Theodore Schwartzによる論文“Anthropology: A Quaint Science”の第二パラグラフの冒頭の部分である。この論文で初めて登場する第一人称複数代名詞は目的格“us”である。

- (4) The “media event” broke upon us some months before most of us had seen the Freeman book, precipitated by an unprecedented blitz of advance publicity, sensational, almost apocalyptic in tone. (Schwartz 1983: 919)

第一パラグラフにおいて既に論争のコンテクストは説明され、これらの“us”がフリーマンを含まないアメリカ人類学の学術コミュニティとしての“us”であることは無理なく解釈できる。特に、最初の“us”について重要なのは擬人化されている主語“media event”との関係である。ここでの実際の行為者は、暗黙のうちに“event”を仕掛けたハーバード大学出版局とフリーマンであり、更に、その後続いたテレビや新聞社各局である。論文最初の“us”をこうした擬人化構文の目的語にすることによって、彼らと彼らによって挑戦されたアメリカ人類学の学術コミュニティが二項対立的な構図によって位置設定されることになる。ニューヨークタイムズ紙の第一面に始まり、「公衆」の中で次々に翻弄される“we”読み手も含めた学術コミュニティとしての連帯感が指標されているのである。

次の例(5)は、翌年1984年のアメリカ人類学会の中の分科学会アメリカ心理人類学会誌 *Ethos* からのものである。Robert Levyによる“Mead, Freeman, and Samoa: The Problem of Seeing Things as They Are”である。最初のパラグラフを見てみたい。例(4)よりももっと直接的な形でフリーマンを論争の責任者として前景化している。

- (5) Derek Freeman, in collaboration with Harvard University Press, stirred things up a bit last Spring with his attack on Margaret Mead and a variety of other more or less associated targets (Freeman 1983). Different consumers of anthropology got variously stirred up by different aspects of that strangely concocted book. The media, because they were threatened in one of their symbiotic celebrities. The Pacific Islanders were presented with yet another problem in trying to understand what the West had done with them and to them. The profession, or at least a few of its fragments, was upset (for the most part) for miscellaneous reasons, in keeping with its current miscellaneous state. (Levy 1984: 85) (下線は筆者による)

代名詞はここではまだ現れていないが、この論文全体に分布する“we-us-our”の指標性を考える上で、この(5)における“different consumers of anthropology”は鍵となる。フリーマン、アメリカ人類学、メディア、そして、サモア人がこの論争の参加者(Levyによれば「消費者」)であり、Levyのディスコースにおける“we-us-our”はこれらの参加者間の政治的な位置設定の構図の中でその指標的意味を構築するのである。続く、第二パラグラフ(6)で初めて目的格“us”と所有格“our”が登場する。

- (6) Freeman believes that the counterattacks from us represent a concerted squawking because he hit us squarely on our passionately held and blinding paradigm—“culture” as the exhaustive explanation of human behavior, denying a deeper and truer and incorrigible biological human

nature. But his study of our culture at a distance, viewed from Canberra and the Antipodes, seems, as these things usually do to natives, off the mark. (ibid., 85)

ここでは、フリーマンの主観に基づいて、アメリカ人類学の学術コミュニティの立場が位置設定されている。この例で特に興味深いのは、アメリカとキャンベラ（フリーマンの所属するオーストラリア国立大学の所在地）の位置関係のメタファーである。北半球と南半球に分かれる地理関係 正反対側にある場所 に基づいて、フリーマンとアメリカ人類学の関係を位置設定しているのである。また、そのような位置関係と距離の中で遠くからこちらを見るフリーマンの視点（“his study of our culture at a distance”）を皮肉ることによって、フリーマンの挑戦を跳ね返すアメリカ人類学コミュニティの弾力性と連帯感を指標するのである。更に、人類学における調査者と非調査者“we (anthropologists)-they (natives)”の関係をフリーマンとアメリカ人類学コミュニティの間に重ね合わせることによって（つまり、複数の二項対立的構図を重層的に重ねることによって）、“we”としての人類学コミュニティの境界線の複層性が指標されている。コミュニティの連帯感 そして、学問分野としてのアイデンティティ はこうした複雑な社会関係の中に位置づけられながら創造されるのである。

この論文全体においては、“we”が16例、“us”が5例、“our”が13例登場するが、これらの代名詞はいくつかの微妙にニュアンスの異なるコミュニティを指標している。まず、16の“we”であるが、アメリカ人類学の学術コミュニティを指標するものは5例である。そのうち3例の“we”に関しては、フリーマンだけでなくミードも含めない今日の学問分野を指標している。つまり、異文化表象の政治学に向きあう今日の人類学コミュニティと半世紀以上前の人類学、更に、その時間的経緯を全く無視しながら挑戦してきたフリーマンとの距離がここで指標されるのである。“we”のうち一番多かったのは、より具体的なフィールドワークの実践者、エスノグラファーのコミュニティを指標する6例の“we”であるが、いずれも“we (ethnographers)-they (natives)”の構図の中に位置づけられている。つまり、コミュニティをめく

る政治性と連帯感が重なって指標されていることになる。興味深いのは、これらのコミュニティにフリーマンが含有されているのかどうか曖昧な点である。更に興味深いのは、直接引用で現れるサモア人の声からの2例の“we”とネパール人の声（Levy自身のネパール研究からのデータ）からの2例である。論争の参加者はアメリカ人類学とフリーマンだけでなく、文化表象の構図では“they”であるそれぞれの人々がここでは“we”として登場する（残りの“we”はトルストイの小説中からの例であり、やはり直接引用化されて現れる）。次に、目的格“us”の5例であるが、（6）の中で2例は登場している。残りの3例のうちの1例は（6）の場合と同じようにアメリカ人類学コミュニティを指標している。後の2例ではより具体的なエスノグラファーのコミュニティが指標されている。ここでも、フリーマンが含有されているかは曖昧である。最後に、13の所有格“our”についてであるが、そのうち9例はエスノグラファーのコミュニティを指標し、4例はより抽象的なアメリカ人類学コミュニティを指標している。

これらの“we-our-us”の数は論文全体の長さ（パラグラフは総数22、語数は約2500）に対して多い。こうした数（つまり、登場する頻度）は一群となって学術コミュニティの連帯感の度合いの強さ 連帯感の強さ を指標しているのである。Levyの論文は20年以上も前に書かれたものであるが、今日読み返しても当時のアメリカ人類学の論争への反応を窺い知ることができるのと同時に、コミュニティの連帯感とアイデンティティが複雑な政治的構図の中に位置設定づけられ構築されているのが見えてくる。ひとつの論文やコメントが次のディスコースにつながり、「公衆」が潜在的に拡張していく中でこうした政治的構図への配慮は不可欠であったと考える。論争自体がアカデミックディスコースとしては特異な存在である。従って、当議論の目的はこれらの例に基づいてアカデミックディスコース全体に適用できるレトリックの法則を探ることではなく、記号の指標性に基づくコンテクスト化に注目することによって、ディスコースと学術コミュニティとのダイナミックな相互作用に注意を喚起することであった。

VII. おわりに

Foucault (1980) が論じるように、知識をめぐるディスコースは権威の問題と密接につながっており、様々な制約が媒介する領域である。本稿では、アカデミックライティング 学術的な制度の中で書くという行為 を社会的実践として捉え、脱コンテクスト化とコンテクスト化の概念に基づきながら知識の権威構築と学術コミュニティへの呼びかけという二つの課題を論じた。これらの課題はそれぞれ一見相反する方向に向かっていているように見えるが、アカデミックライティングにおいては等しく重要な社会記号論的意味を持つ。前半では、アカデミックディスコースの脱コンテクスト化への志向に注目し、規範としての自律的テキスト観の発展とその社会的、文化的特殊性を考察した。特に、17世紀のロンドン王立協会をめぐる科学的知識の表象の問題を手がかりとしながら、当時の記号観やテキスト観を検討した。中でも、ジョン・ロックによって提唱されたコミュニケーション観を見ることによって、指示言語イデオロギーが支配的な今日のアカデミックライティングの系譜を考えた。一方、後半では、コンテクスト化への志向に注目し、実践としてのアカデミックライティングの問題を考察した。ミード・フリーマン論争の実例に基づきながら、知識構築がディスコースと学術コミュニティとのダイナミックな相互作用の中で行われることを論じた。更に、「公衆」としての学術コミュニティの社会学的問題を取り上げながら、記号の指標性の重要性を指摘した。

注

- 1 ここで言うところの「書きことば」とは文字の媒体そのものを指すと同時に、特定の言語形態に基づくスタイル（文体）も指している。例えば、本稿のセクションIVで論じているように、17世紀英国の科学的知識の表象において、英語のプレーンスタイルは重要な書きことばの媒体と考えられた。しかし、これも指摘していることであるが、プレーンスタイルは当時の文化的、社会的コンテクスト例えば、古典語との関係やロンドン王立協会に代表される学術制度の存在などの中で規範として機能していたのであり、そのイデオロギー的側面は見逃せない。

本稿では、「書きことば」が常に特定の制度的状況の中に位置づけられており、中でも、アカデミックテクストを生産することとは社会的実践であり、知識の権威をめぐる政治学から切り離せないという立場を取る。その意味では、Ong (1982)、Goody (1986)、Goody and Watt (1968) に代表されるように、書きことばをイデオロギーから切り離し可能で中立的なテクノロジーとして捉える立場とは異なる。

2 Atkinson は実験報告のジャンルに焦点を当てることによって、17世紀初期においては書き手中心 (“ego-centric”) のディスコースが主流だったのに対し、19世紀には対象中心 (“object-centered”) のディスコースに変化していく大きな流れに注目している。Biber (1988) に基づく量的分析の方法論に基づきながら、Atkinson はこうした大きな変化に対応する言語形式のパターンとして、第一人称、二人称代名詞や現在時制の使用頻度の変化などを論じている。

3 ディスコースを認知的側面から研究する Chafe にとって、「断片化」「統合化」と「関与」「分離」の二つの軸は話しことばと書きことばの研究において主要な分析基準となっている。ディスコースが文ではなく、「思考単位」(idea unit) という認知的単位に基づいて構成されているという視点から出発することによって、Chafe (1985) は書きことばにおける思考単位が話しことばにおけるものに比べてより多くの情報内容を「統合」していること、話しことばは、より「断片的」であること を指摘している。更に、話しことばと書きことばのコミュニケーション上の相違が直接的な対面的インターアクションの有無に関わるものとして、話しことばが対面的な「関与」を必然的に伴うディスコース上の特徴を持つものに対し、書きことばがそのような関係のダイナミクスからは距離を置いた「分離」した ディスコースであることを論じている。

4 例えば、Leith によれば、1687年のニュートンの *Principia* がラテン語で書かれた主要論文の最後であり、それ以後は英語があらゆる領域で第一に選択される言語になったという (Leith 1983: 48)。

[参考文献]

- Aasleff, Hans. 1982. *From Locke to Saussure*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Adolph, Robert. 1968. *The Rise of Modern Prose Style*. Cambridge: MIT Press.
- Atkinson, Atkinson. 1999. *Scientific Discourse in Sociohistorical Context: The Philosophical Transactions of the Royal Society of London, 1675-1975*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Bauman, Richard. 2004. *A World of Others' Words: Cross-cultural Perspectives on Intertextuality*. Malden, MA: Blackwell.

- Bauman, Richard and Charles Briggs. 1990. Poetics and Performance as Critical Perspectives on Language and Social Life. *Annual Review of Anthropology* 19: 59-88.
- Bauman, Richard and Charles Briggs. 2000. Language Philosophy as Language Ideology: John Locke and Johann Gottfried Herder. In P. V. Kroskrity, ed., *Regimes of Language*. Santa Fe, New Mexico: School of American Research Press.
- Bauman, Richard and Charles L. Briggs. 2004. *Voices of Modernity: Language Ideologies and the Politics of Inequality*. New York: Cambridge University Press.
- Biber, Douglas 1988. *Variations Across Speech and Writing*. New York: Cambridge University Press.
- Briggs, Charles L. 1996. The Politics of Discursive Authority in Research on 'the Invention of Tradition.' *Cultural Anthropology* 11: 435-469.
- Chafe, Wallace. 1982. Integration and Involvement in Speaking, Writing, and Oral Literature. In D. Tannen, ed., *Spoken and Written Language: Exploring Orality and Literacy*. Norwood, NJ: Ablex.
- Chafe, Wallace. 1985. Linguistic Differences Produced by Differences Between Speaking and Writing. In D.R.Olson, N.Torrance and A.Hildyard, eds., *Literacy, Language, and Learning: The Nature and Consequences of Reading and Writing*. New York: Cambridge University Press.
- Clifford, James. 1997. *Routes: Travel and Culture in the Late Twentieth Century*. Cambridge: Harvard University Press.
- Clifford, James and George E. Marcus. 1983. *Writing Culture*. Berkeley: University of California Press.
- Cohen, I. Bernard, ed. 1990. *Puritanism and the Rise of Modern Science: The Merton Thesis*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press. .
- Collins, James. 1996. Socialization to Text: Structure and Contradiction in Schooled Literacy. In M. Silverstein and G. Urban, eds., *The Natural History of Discourse*. Chicago: University of Chicago Press.
- Collins, James and Richard K. Blot. 2003. *Literacy and Literacies: Texts, Power, and Identity*. New York: Cambridge University Press.
- Crapanzano, Vincent. 2000. *Serving the Word: Literalism in America from the Pulpit to the Bench*. New York: The New Press.
- Flowerdew, John. 2002. *Academic Discourse*. New York: Longman.
- Foucault, Michel 1970[1966]. *The Order of Things: An Archaeology of the Human Sciences*. New York: Random House.
- Foucault, Michel 1980. *Power and Knowledge*. New York: Pantheon Books.
- Freeman, Derek. 1983. *Margaret Mead and Samoa: The Making and Unmaking of an Anthropological Myth*. Cambridge: Harvard University Press.

- Geisler, Cheryl. 1994. *Academic Literacy and the Nature of Expertise: Reading, Writing, and Knowing in Academic Philosophy*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Goody, Jack. 1986. *The Logic of Writing and the Organization of Society*. New York: Cambridge University Press.
- Goody, Jack and Ian Watt. 1968. The Consequences of Literacy. *Comparative Studies in Society and History* 5: 304-345.
- Guyer, Paul. 1994. Locke's Philosophy of Language. In V. Chappell, ed., *The Cambridge Companion to Locke*. New York: Cambridge University Press.
- Harburmas, Jurgen. 1989. *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*. Cambridge: MIT Press.
- Hyland, Ken. 2001. Bringing in the Reader: Addressee Features in Academic Articles. *Written Communication* 18: 549-574.
- Hyland, Ken. 2002. *Disciplinary Discourses: Social Interactions in Academic Writing*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Hyland, Ken. 2005. Stance and Engagement: A Model of Interaction in Academic Discourse. *Discourse Studies* 7: 173-192.
- Inoue, Miyako. 2006. *Vicarious Language: Gender and Linguistics Modernity in Japan*. Berkeley: University of California Press.
- Jakobson, Roman. 1960. Linguistics and Poetics. In T. A. Sebeok, ed., *Style in Language*. Cambridge: MIT Press.
- Jones, Richard Foster. 1951. *The Seventeenth Century: Studies in the History of English Thought and Literature from Bacon to Pope*. Stanford: Stanford University Press.
- Jones, Richard Foster. 1953. *The Triumph of the English Language*. Stanford: Stanford University Press.
- Jones, Richard Foster. 1961. *Ancients and Moderns: A Study of the Rise of the Scientific Movement in Seventeenth-Century England*. New York: Dover Publications.
- Kroskirty, Paul V. ed. 2000. *Regimes of Language*. Santa Fe, New Mexico: School of American Research Press.
- Lee, Benjamin. 1997. *Talking Heads*. Durham: Duke University Press.
- Leith, Dick. 1983. *A Social History of English*. New York: Routledge and Kegan Paul Ltd.
- Levy, Robert I. 1984. Mead, Freeman, and Samoa: The Problem of Seeing Things as They Are. *Ethos* 12: 85-92.
- Locke, John. 1997. *An Essay Concerning Human Understanding*. London: Penguin Books.
- Markkanen, Raija and Hartmut Schroder, eds. 1997. *Hedging and Discourse*. Berlin: Walter de Gruyter.
- 松木啓子 1999 「ナラティブアプローチの可能性と限界をめぐって 『異文化』 理

- 解の詩学と政治学』『言語文化』第1巻第4号 同社大学言語文化学会
松木啓子 2001. 「エスノグラフィックインタビューにおける指標的装置 ディス
コース、テキスト、メタプラグマティックス」『現代思想』第28巻第8号 東
京：青土社
- Mead, Margaret. 1928. *Coming of Age in Samoa*. New York: William Morrow.
- Merton, Robert K. 1970. *Science, Technology & Society in Seventeenth-Century England*.
New York: Howard Fertig.
- Mertz, Elizabeth. 1996. Recontextualization as Socialization: Text and Pragmatics in the
Law School Classroom. In M. Silverstein and G. Urban, eds., *The Natural History of
Discourse*. Chicago: University of Chicago Press.
- Montgomery, Scott L. 1996. *The Scientific Voice*. New York: The Guilford Press.
- Myers, Greg. 1989. The Pragmatics of Politeness in Scientific Articles. *Applied Linguistics*
10: 1-35.
- The New York Times* (Late City Final Edition). Jan.31, 1983.
- Olson, David R. 1977. From Utterance to Text: The Bias of Language in Speech and
Writing. *Harvard Educational Review* 47: 257-281.
- Olson, David R. 1993. Literacy and Objectivity: The Rise of Modern Science. In Olson, D.
R. and N. Torrance, eds., *Literacy and Orality*. New York: Cambridge University Press.
- Ong, Walter J. 1982. *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. London and
New York: Methuen.
- Oshima, Alice and Ann Hogue. 2006. *Writing Academic English*. White Plains, NY:
Pearson Education.
- Philips, Susan U. 1998. *Ideology in the Language of Judges: How Judges Practice Law,
Politics and Courtroom Control*. New York: Oxford University Press.
- Reiman, Jonathan E. and Joyce D. Hammond. 1985. Some Comments on the Freeman-Mead
Controversy. *American Anthropologist* 87: 393-394.
- Roscoe, Paul. 2003. Margaret Mead, Reo Fortune, and Mountain Arapesh Warfare.
American Anthropologist 105:581-591.
- Roy, Robin. 2004. The Ghost of Caliban. In *Scandals and Scoundrels: Seven Cases That
Shook the Academy*. Berkeley: University of California Press.
- Rudwick, Martin J. S. 1985. *The Great Devonian Controversy*. Chicago: The University of
Chicago Press.
- Schieffelin, Bambi B. and Kathryn A. Woodlard, & Paul V. Kroskrity, eds. 1998. *Language
Ideologies*. New York: Oxford University Press.
- Schwartz, Theodore. 1983. Anthropology: A Quaint Science. *American Anthropologist* 85:
919-929.

- Scollon, Ron and Suzanne B.K. Scollon. 1981. *Narrative, Literacy, and Face in Interethnic Communication*. Norwood, NJ: Ablex Publishing Corporation.
- Scollon, Ron and Suzanne W. Scollon. 1995. *Intercultural Communication*. Cambridge: Blackwell.
- Silverstein, Michael. 1976. Shifters, Linguistic Categories, and Cultural Description. In K. Basso and H. Selby, eds., *Meaning in Anthropology*. Albuquerque: University of New Mexico Press.
- Silverstein, Michael and Greg Urban. 1996. The Natural History of Discourse. In *The Natural History of Discourse*. Chicago: University of Chicago Press.
- Singer, Milton. 1989. Pronouns, Persons, the Semiotic Self. In B. Lee and G. Urban, eds., *Semiotics, Self, and Society*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Street, Brian V. 1984. *Literacy in Theory and Practice*. New York: Cambridge University Press.
- Swales, 1990. *Genre Analysis: English in Academic and Research Settings*. New York: Cambridge University Press.
- Van Dijk, Teun A. 1993. *Elite Discourse and Racism*. London: Sage Publishers.
- Vickers, Brian. 1987. *English Science, Bacon to Newton*. New York: Cambridge University Press.
- Wales, Katie. 1996. *Personal Pronouns in Present-day English*. New York: Cambridge University Press.
- Warner, Michael. 1990. *The Letters of the Republic: Publications and the Public Sphere in Eighteenth-Century America*. Cambridge: Harvard University Press.
- Warner, Michael. 2002. *Publics and Counterpublics*. New York: Zone Books.
- White, Hayden 1978. *Tropics of Discourse*. Baltimore: John Hopkins University Press.
- Yans-McLaughlin, Virginia. 1985. Comment on the Freeman/Mead Controversy. *Sings* 10: 594-597.

The Social Semiotics of English Academic Writing: Discourse of Knowledge Construction and Language Ideology

Keiko MATSUKI

Key words: Semiotics, Academic discourse, Language ideology,

Knowledge and Authority

Academic writing is an institutionally-situated communicative practice in the sense that it involves the inseparable realms of knowledge and authority (Foucault 1980). Disciplinary knowledge is constructed through academic discourse, and the practice of academic writing is both practically and ideologically important for the construction of a discipline as well as knowledge itself. By paying attention to such an institutional apparatus surrounding knowledge and authority, this paper examines what norms mediate the practice of English academic writing. The study looks into a complex functioning of such norms concerning English written academic prose, particularly, in terms of sign, discourse, and text. Previous work on academic writing has been concentrated in the area of applied linguistics with pedagogical concerns. In this regard, the present study illuminates academic writing from a different perspective, a perspective on the dynamic interaction between society and sign.

The study consists of two major discussions. The first discussion focuses on the norms mediating academic written prose. One important norm concerns the idea of “autonomous text” (Olson 1977). It is a decontextualized text, a text which is separable from the context of “here and now.” It logically implies the autonomy of knowledge constructed, and furthermore its authority that transcends any time and space. However, this idea of text is an ideological construct. Academic writing is not a neutral notion; it is permeated with particular sociocultural meanings. In order to examine such meanings, the discussion explores its genealogy which dates back to the birth of modern science—along with Puritanism and also utilitarianism—and its institutional apparatus represented primarily by the Royal Society of London in the seventeenth-century England. By looking at specific discourses of such advocates of modern science as Thomas Sprat and John Locke among many, the discussion illuminates the significance of

“plain English” which is mediated by referential language ideology. In the sociocultural context then, this particular rationalization of language led to the idealization of English language, in contrast to classic languages like Latin and Greek, as the language of new scientific knowledge representation (Bauman and Briggs 2003).

The second discussion focuses on the actual practice. This latter discussion particularly illuminates the importance of academic community as context. Academic writing is a communicative practice, and writers always address their discourse to the audience. A variety of previous studies have pointed out the significance of such an interactional aspect of academic writing, and discussed how a writer brings in an “implied” reader into his/her discourse. Here, the construction of virtual interaction is considered to be a rhetorical strategy for persuasion in academic writing. In this regard, the present study agrees to its rhetorical importance, while it is distinct from previous studies in that it looks at the interaction of discourse by conceptualizing the audience as a more socially open-ended context, and exploring a semiotically created linkage of indexical meanings in the politics of social positions and relations. In order to illuminate such semiotic dynamics, the discussion focuses on the indexicality of the first personal plural pronoun “we” actualized in specific discourse examples taken from the Mead-Freeman Controversy in contemporary anthropology. By examining concrete use and function of this pronominal index in discourse, the study explores the interaction between academic discourse and academic community.